

オーストラリアの小学校と性教育 —カーティン工科大学アカデミックオフィス駐在報告—

田代美江子

はじめに

2002年7月21日から9月末にかけて、西オーストラリア州、パース市にあるカーティン工科大学衛生学部内アカデミックオフィスに駐在するチャンスに恵まれた。私にとっては初めての海外長期滞在であり、あわただしい中での出発だったため、十分な準備をすることはできなかった。しかし、1年前、2001年7月から10月にかけてアカデミックオフィスに駐在された橋本教授から、性教育、ジェンダー関係の資料収集について効率よく進められるようアドバイスをいただくことができた。

はじめの5週間は学生とともに語学研修と栄養研修に参加したため、自分の研究を進めるためだけに動くことのできた期間は、実際には1ヶ月弱であった。それでも、自分の語学力や準備不足を考えれば、十分実りのある有意義な体験であった。駐在の目的、研究計画、主な活動内容と成果については、別紙「カーティン工科大学アカデミックオフィス駐在報告書」を参照されたい。ここでは、駐在の期間に見学することのできた西オーストラリアのSouth Ballajura Primary School—サウス・バラジュラ小学校の様子とそこで聞き取りをした性教育について報告したいと思う。教育学を専門領域とする私にとって、学校への訪問は行く前からのたつての希望であったが、前もって手配することができなかったため、現地で活動を初めてから多くの方の協力によって実現したものである。サウス・バラジュラ小学校の他、Hamilton Senior High School—ハミルトン高校、パース日本人学校(スカボロー小学校内)にも訪問することができた。ハミルトン高校でも、スクールナースの方にたいへ

んお世話になり、高校の性教育について多くのことを聞くことができた。ハミルトン高校についての詳しい報告は別の機会に譲りたいと思うが、以下でも、小学校との比較において若干触れたいと思う。

1. 訪問の経緯

パース市から車で1時間以上かかるサウス・バラジュラにある小学校へ、9月4日、13日の2度にわたって訪問、見学することができた。この訪問が実現したのは、語学研修中のホームステイ先のホスト・マザーであるロビンさんが、本校の先生をなさっている友人のケリーさんを紹介してくださったからだ。ケリー先生は、英語を母国語としない子どもたちを対象に英語を教えており、基本的には幼児学校(Preprimary School)での英語の授業を担当されている。さらにケリー先生からご紹介いただいて、6年生の担任の先生とスクール・ナースの方にお話を伺うことができた。

2. 学校の様子

サウス・バラジュラ小学校は西オーストラリアの中でも比較的大規模な小学校で、全校で900～1000人程の子どもたちがそこで学んでいるという。学校の中には、Kindergarten(幼稚園:3～4歳)、Preprimary School(幼児学校:5歳)、Primary School(小学校:6～11歳・6学年)が同じ敷地内にある。西オーストラリアの小学校は7学年までであるところが多いが、本校は6学年までで、すぐ近くにCommunity Collegeがあり、そこに7学年から行くのだという。

小学校の1クラスは28人が上限とされ、そ

こに1人の担任がつく。幼稚園や幼児学校のクラスはもっと小規模である。知的・身体的ハンディキャップを持った子どもも1学年に5、6人おり、通級のシステムを取り入れ、インテグレーションを基本にしているということであった。見学したクラスにも強度のアレルギーを持つ子どもがおり、彼のために専門の教師が常に待機していた。1人担任制といってもさまざまな状況に応じて、複数の教師が関わり、協力体制にあることがわかる。ケリー先生も、後で詳述する小学校での授業で、英語の不得意な子どもへの援助を行っていた。

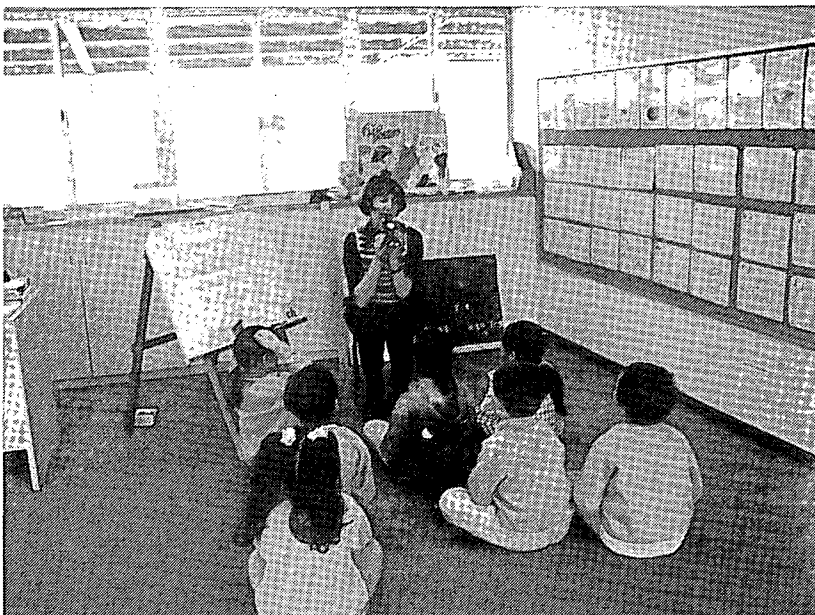
ケリー先生のように英語を母国語としない子どもに英語を教えるためには、3年間の大学教育の後、1年間の専門教育を受ける。ケリー先生には2人の女性のアシスタントがついており、英語を話すことができない親との連絡係などを務めているという。2人ともベトナム人であり、英語を母国語としない子どもの20%程度がベトナム人だということであった。

広々とした学校は校舎も美しく、それぞれの教室の中もさまざまな工夫がなされている。例えば幼稚園の教室には机、工作のための

スペース、キッチン、オープンなどが全てそろっており、トイレも教室内にあった。小学校の教室も子どもの作品などが美しく飾られていて、とても楽しい雰囲気が作り出されていた。私が見学した小学校の教室は、机がコの字型に並べられており、机の上には消しゴムや鉛筆などは十分なだけ用意されていて、子どもたちは好きなように使うことができる。

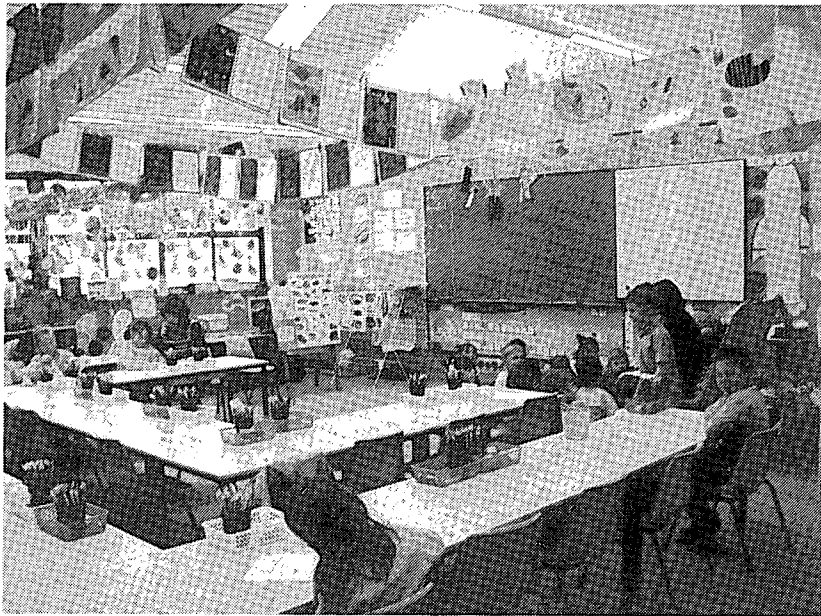
3. 授業の見学

3つの授業を見学することができた。授業時間は40分。一つは幼児学校のクラスで、その曜日に当たっている何人かの子どもが、自分の身近に起こったニュースを、みんなの前で発表することから始まった。英語の苦手な子どもたちは、はにかみながらも先生の助けをかりて発表し、聞いていた子どもたちの質問にも真剣に答えていた。幼児学校の特に英語が苦手な子どもをピックアップして行っている授業も見ることができた。そこでは輪になって英語の歌を歌ったり、人形を使って発音の練習をしたり、またジンジャー・ブレッドマンの絵本を使った楽しい授業が行われていた。



2学年の作文の授業(writing class)も見学させていただいた。26人のクラスであったが、担任の他に、英語の不得意な子どものためにケリー先生がサポートについていた。子どもたちは文法を学びながら、自分や家族が登場する簡単な作文を、教員の用意したワークシートを使って完成させていくのだが、進度にはかなりのばらつきがあった。子どもたちは自

分が課せられている課題をクリアすると、担任の所に持っていきチェックを受ける。先にできた子どもたちには次の課題を与え取り組ませていた。課題が達成できた子どもたちに対してほめることも忘れない。作文が完成すると、それぞれが取り組んでいるところで、その作品を紹介し、よくできていることをみんなの前で示していた。



4. 小学校におけるスクール・ナース

ケリー先生の紹介でスクール・ナースの方にもお話もお伺いすることができた。西オーストラリアでは、3年間のナーシング・スクールの後、2年間コミュニティ・ナースのコースで勉強して資格を取得する。コミュニティ・ナースには、地域で活動する場合、チャイルド・ケアに関わる場合、そしてスクール・ナースといった3種類の働き方があるということであった。彼女はスワン・ヘルス・サービスという所に所属しており、そこから5つの学校に配属されて

いるのだという。サウス・パラジュラ小学校には週に1日か2日のペースで来ている。5校をかけ持ちしているということ、週にわずかな日数しかスクール・ナースが学校にいないということに少し驚いてその点を尋ねてみた。小学校の場合、子どもと担任の関係が密接であり、担任を務める教員も子どもの身体や健康に関する一定の知識を持っているので、特に問題はないという。上で見たように、特に問題のある子どもには特別な担当者がついている。中学校・高校になると、生徒と担任の距離

が開き、逆に生徒にとってスクール・ナースはより重要な存在となるようである。私が訪問したハミルトン高校でも、スクール・ナースの方は毎日学校に来ていた”。

スクール・ナースは他の教員との連携はもちろん、親、コミュニティーとの連携もあり、スクール・ナース、警察、カウンセラー、教員などが集まって子どもたちの問題を共有し合うミーティングも定期的に行われているということであった。学校内の性教育においても、担任とスクール・ナースは協力し合うことがあり、例えば、月経に関して担任の説明以上にもっと聞きたいことが子どもにあるときや、また、担任が避けたいと思う問題を取り上げるとき、依頼があればスクール・ナースが性教育に関わることもあるという”。

5. 性教育に関連して

第二次性徴の学習が始まる6学年の担任の先生にもお会いすることができ、主に性教育に関わる点について話をお伺いすることができた。

まず、学校全体の取り組みとして、学校内に「サジェスション・ボックス」というものが設置されており、性の問題も含め子どもたちはそこに質問や意見など何でも投函することができるようになってきているという。このボックスを設置している目的は、一つには、性をはじめ、子どもたちが様々なことについて質問しやすい状況を作ることであり、子どもたちに学校では何を尋ねてもいいのだということを知らせることにあるという。それが、性をポジティブにとらえる雰囲気を作り出していくことにつながると指摘されていた。二つ目には、子どもの知識を確認することにもなり、子どもに必要な課題を明らかにするとともに、間違った情報の訂正をすることができるということであった。例えば、ドラッグの問題などが出てきた時には、子どもたちに相談所について具体的に教えたりするのだという。非常に興味深い試みであるし、実

際、効果的に機能しているように思われた。

実際に実践している性教育については、次のような点が指摘されていた。第1に、第二次性徴期の身体の変化について学ぶ際、性だけに限らず、身体全体のことを学ぶことが前提となっているということである。特別にセックスだけを教えるのではないという。月経についての学習は、この学校では6学年で実施しているが、他の学校では4、5学年など、もう少し早くやるところもあるという。性の学習は、男女共学で行われている。

第2に、関係性の学習がとても重視されていること。例えばその具体的課題として、1年生の段階から、意にそぐわないことがあった時には“No”とはっきり言うことが学習のテーマとして重視されている。第3に、本やビデオなどの教材を有効に使っており、私も資料調査にいった家族計画協会で作製、提供している教材などが積極的に利用されていた。

第4に、性教育は、他の教科との関連性を持たせながら担任が自分でコーディネイトして実施しているとのことであった。訪問した時期には、そうしたやり方で週に2回ほど性の問題を取り上げているとのことであったが、「次の学期では毎日でも取り上げたい」と6学年の担任の先生はおっしゃっていた。第5として、保護者にも連絡しながら性に関する教育は行っており、今のところクレームはないということであった。第6に、4ですでに述べたようにスクール・ナースとの連携もしているとのことであった。

おわりに

今回の報告では、サウス・バラジュラ小学校のみの様子しか取り上げることができなかったが、はじめにでも触れたように、ハミルトン高校、パース日本人学校へも訪問し、またカトリック系の学校の先生にも、性教育の問題も含めお話をお聞きする機会があった。西オーストラリアの学校教育のシステムには、学校運

営に関わるスクール・コミュニティの存在など、地域と学校、子どもの発達をサポートしていく社会的環境など、非常に興味深いものがある。今後、こうした点も深めて、オーストラリアの教育システムについて理解を深めたいと思う。

また、カーティン工科大学内の学生やバーなどの他の場で知り合った若者に、30人弱ではあるが、彼らの性教育の体験を尋ねることができた。調査としては十分なものではないが、若者の性教育体験を問うことは、その実態を明確にするためにも重要であると考えている。実際、私がインタビューしたほとんどの若者は(特に大学生は)、自分の性に関する知識は十分だと認識していた。しかし、一方では「性についてもっとオープンに語られるべき」だという意見も多かった。このような若者の認識と、妊娠、中絶、性感染症など、彼らの性をめぐる実態についても、収集してきた性教育教材の内容とつき合わせて分析していけたらと思っている。

最後に、今回の学校訪問では、パース事務所のハーモン・令子さんにもたいへんお世話になった。語学力に不安を持つ私にとって、彼女が忙しい中、私に同行してくださったことはたいへん心強く、また実際、いろいろと助けていただくことで、より大きな収穫を得られたと思う。心より感謝したい。

*1 ハミルトン高校では、スクール・ナースのオフィスの近くに、スクール・カウンセラー、ポリス・オフィサー、そしてチャプレン(Chaplain・牧師)のオフィスがあり、その一面には、朝からいつも生徒がやってきて、様々なことを気軽に相談できるような雰囲気があった。チャプレン・オフィスには若い男性の牧師さんがおり、宗教的というよりも、とりあえず何でも相談にのってもらえる場所として機能しているのだという。

これらのオフィスの横のネットワークはもちろん、そのネットワークは学校内だけではない。例えば、生徒の妊娠の問題などは、家族計画協会などが紹介され、生徒は多くの情報を提供され、様々な選択肢の中から当人の意志が尊重される形での対応が保障されている。ドラッグの中でもマリファナなど、子どもの命に関わることは別であるが、それ以外の問題では、親にすぐに報告するということなく、子どもの人権が優先されるということであった。

*2 ハミルトン高校でも、健康や性に関わる教育は体育の教員が担当しており、スクール・ナースは資料などの提供やT・Tといった形で協力しているということであった。

別紙

2002年11月29日

カーティン工科大学アカデミックオフィス駐在報告書

田代美江子

駐在期間:2002年7月21日より9月29日まで (7/20 夜成田発, 9/30 朝成田着)

研究調査目的

- ①性教育の教材、資料等を収集する。
- ②性教育の実践に触れ、可能であれば、性教育に関する調査を行う。
- ③ジェンダー問題、特に教育についてのその現状を知るとともに、その教材、資料等を収集する。
- ④性教育、ジェンダー問題を把握する上で背景となる、オーストラリアの人々の生活、文化についての認識を深める。

研究調査計画

- ①語学研修に参加するとともに、ヘルス・プロモーション学部で開講されている講義から関連するものを選択し、受講する。また、それを通して、そこでの研究・教育の内容を把握する。
- ②カーティン工科大学図書館所蔵の性および性教育、ジェンダー研究に関する文献を探し、資料を収集する。他の図書館、書店、学校、教育委員会等を尋ね、資料を収集する。
- ③性教育、ジェンダー研究に関わっている人々とコンタクトをとり、具体的な教育実践や研究の現状を把握する。

駐在中の活動内容と成果

1. 夏期オーストラリア学生研修への参加

大学および短大の学生23名の研修受講生とともに語学研修および専門研修に参加し、夏期オーストラリア学生研修の全体について把握することができた。

具体的には、

- ・学生の研修、ホームステイなど生活全般における問題を把握すると同時にアカデミックオフィスのスタッフとともに学生からの相談へ対応した。
- ・特に専門研修の意義について再認識することができた。その際、非常によく計画された多様な専門研修をより有意義なものにするために、学生への事前指導をさらに充実させる必要があると感じた。
- ・語学研修の中で課された課題をもとに、カーティン工科大学の大学生を対象に、小規模ではあるが、性教育の体験に関する事例調査を実施した。

2. カーティン工科大学大学院授業への参加

①ヘルス・プロモーション・メソッドのゼミへの参加(7月25日よりスタート)

…木曜日(毎週ではない)午後5時～8時に開講されているグラハム・ブラウン氏によるゼミに参加する。ブラウン氏は WA のエイズ評議会のスタッフでもあり、西オーストラリアの

HIV/AIDS 問題への取り組みに関しても有益な情報・資料を得ることができた。ヘルス・プロモーション・メソッドの教育方法についても多くの示唆を得ることができた。そこで知り合ったカーティン大学の学生からも、性教育の経験に関する多少の情報を収集した。

②学位論文作成のための講義への参加(9月から毎週火曜日ビンズ教授によって開講)

…大学院生のために、お昼休みの時間を使って開かれていた学位論文作成のための講義へ参加。研究を進める上でのきめ細かな指導が行われていること、実際の学位論文の注意点について多くを学ぶことができた。

③その他、ヘルス・プロモーション、ヘルス・サイエンス関係の講演・講義など学内のメールなどで得られた情報からいくつか参加した。

3. 学校への訪問

①サウスパラジュラ小学校への訪問

…比較的大規模なサウスパラジュラ小学校へ2回にわたって訪問することができた。

そこで英語を母国語としない子どもたちの英語教育を担当するケリー先生の好意で、学校内、いくつかの授業を見学した。性教育について、高学年を担当する教師に、2回目の訪問でスクールナースの方とも話をすることができた。

②ハミルトン高校への訪問

…専門研修の際に訪れたハミルトン・シニア・ハイスクールでスクールナースであるモーリン先生に性教育について話を聞くことができた。後日改めて高校を訪問し、保健室の見学、資料のコピー、教材の写真撮影を行った。また、スクールカウンセラーの方とも話をすることができた。

③パース日本人学校への訪問

…スカボロ小学校内にある日本人学校を訪問し、校舎の見学、校長・教頭先生から、日本人学校の今日的な状況や、役割の変化についてお話をお伺いすることができた。

4. 性教育に関する資料の収集および施設への訪問

①カーティン工科大学図書館での検索と収集

…インターネットによる検索、細かい内容の確認が容易にできるようになっており、貸し出しも申し込めるようになっていた。大いに活用することができた。図書館には、学生が講義をとるにあたり前もって押さえておくべき文献、講義で使われる資料などが整理されており、大学で開講されている講義の具体的内容ある程度みることができるようになっていた。特に、健康教育、性教育の講義についての資料をコピーすることができた。

②カーティン工科大学教育学部図書館での資料収集

…教育学部の図書館では、教材などを中心とした資料をみることができた。特に、性教育に関する絵本、指導書などの資料をみることができた。

③家族計画協会への訪問と資料収集

…パース市内にある家族計画協会内の図書館で、パンフレットの収集、資料のコピー、性教育に関する絵本、教科書などを購入することができた。

④教育教材ストア

…親、教師が教科書や教材を購入するための専門店で、性教育を含む健康教育の指導書を購入することができた。

⑤エイズ協議会への訪問

…すでに受講していたヘルス・プロモーション・メソッドのブラウン先生の好意で、エイズ評議会の内部を見学し、話を聞くことができた。パンフレットの収集も行うことができた。このエイズ評議会の運営は、財政的には 1/2 をオーストラリアが、1/4 を WA が出しており、残りの 1/4 が寄付によってまかなわれているとのことで、多くの登録ボランティアによって支えられていた。ドラッグの針による感染、同性愛者間の感染、地域教育、学校教育への援助など、様々な取り組みがなされ、大きな効果を上げていることがわかった。

⑥ WA 雇用機会均等委員会への訪問

…パース市内にある WA 雇用機会均等委員会へ訪問し、そこで出しているブックレット、パンフレットを収集した。

駐在を終えて

約9週間という短い期間ではあったが、多くの貴重な体験をすることができた。はじめの5週間は、研修とホームステイを体験することで、自分の研究を進めるという点では十分な時間が確保できなかったが、本学の研修の全体を把握できたというだけではなく、私自身のその後の活動に大きなメリットがあった。特にホームステイを通じて知り合うことのできた人々の援助で、学校への訪問などがスムーズに進んだことは大きな成果だったと思っている。また、目的の一つであった、オーストラリアの人々の生活、文化についての認識を深めるという点でも、非常に有意義であった。

短い期間の中で、効率よく研究調査を進める上で、拠点としてのアカデミックオフィスの存在は非常に重要であった。また、そのスタッフであるハーマン・かよ子さん、ハーモン・令子さんによるきめ細かなサポートによって、当初の予想をはるかに超えた成果が得られたことを心より感謝したい。

こうした機会を与えていただいたことに感謝するとともに、今後、収集した資料を整理・分析し、その成果を本学の教育実践において還元していきたいと思う。

以上